

第 13 回オンラインセミナー  
「コロナ禍で学んだ大きな違い：英国流儀 vs 日本流儀」  
報告書

コロナ禍は、各国の文化、社会、経済的背景等の違いから、それぞれの国の特徴を浮き彫りにしました。

今回のセミナーでは、「国民性(特に若手メンタリティ)」「観光」「アルコール飲料業界」という多彩なトピックにおいて感じる”日本と英国の違い”について、下記の講師の方々から、現地情報を踏まえてご講演いただきました。

## 1. 概要

日 時：2022 年 1 月 21 日(金)19:00～20:30(日本時間)

講 師：

前・在英國日本国大使館一等書記官(現・財務省主計局課長補佐) 片岡 修平 氏

「攻める英国、守る日本～日英のウィズコロナ時代の若手メンタリティの違い～」

日本政府観光局(JNTO)ロンドン事務所 所長 地主 純 氏

「日本と英国での旅行市場の違い」

酒サムライ英国代表 日本酒造組合中央会 UK デスク 吉武 理恵 氏

(日本側：日本酒造組合中央会副会長、浦霞酒造(株)佐浦)代表取締役社長 佐浦 弘一氏)

「コロナで見えたアルコール飲料の(相対的)重要性」

当日参加者数：81名

プログラム：①開会挨拶・講師紹介(19:00～19:05)

②講演(19:05～19:50)

③意見交換・質疑応答(19:50～20:30)

## 2. 講演

### (1) 片岡氏

○日本(第3波)・英国(ロックダウン)～規則を攻めるメンタリティの差～

- ・新型コロナ感染者について、日本は、2020年の年末で約4,000人、そして年始に8,000人超と急増した。一方、英国は年末に最大80,000人超と日本の10倍の感染者が出ており、数値上は日本よりも深刻であるにも関わらず、①ロックダウンにより営業停止を義務付けられているにも関わらず深夜のダンスパーティ、②違法なホームパーティ

イ、③閉鎖中のパブの外席に勝手に座って酒を飲む、といったようなことが行われ、英国の若者における「友人と飲んで離せないなら死んだ方がマシ(将来よります今が大事)というメンタリティ」が垣間見えた。

#### ○ウィズコロナ時代の英国市場 ~産業・雇用・教育によるメンタリティの差~

- ・ロンドン中心部のトラファルガー広場で開催されている日本文化の祭典「ジャパン祭り」で、来場したジャマイカ人から「この小瓶で飲める炭酸の酒いいねえ！コーラみたいに飲めるのがいいよ」という声が聞かれた。これは、少数派意見として無視してよいものでしょうか？実は、英国、特にロンドンは、移民ほか様々な国籍の方が大宗を占めるため、ジャマイカ系英国人も多い。決して無視できる意見ではないと考える。
- ・新型コロナワクチンが、2021年5月には30代から打てるようになったが、私の子供が通う英国の公立小学校の親たちにワクチンを打つか否かを尋ねたところ、「ワクチンは打たないよ。数日、仕事も家事もできなくなるから」との答えが大多数であり、ワクチンに対する反応が、日本とは真逆であった。新型コロナは、単純労働や低スキル労働者などの低賃金労働者に大きく影響し、賃金格差が拡大していた状況もあり、だからこそ、「ワクチンを打って寝込む余裕はない(将来よります今が大事)というメンタリティ」が透けて見える。
- ・2020年、英国は中小企業が99.3%であり、このうち社員ゼロ人(個人事業主)が75%超となっている。これらの事業者は、家飲みや旅行すら経費で落とせる状況にあるため、「もっと消費しようかな」というメンタリティに繋がる。

#### ○地方自治体、意味のある海外市場開拓へ

- ・日英EPAを経て、本物のお酒のブランドを「守りつつ」、お互いの市場へ「攻める」時代となってきている。海外に対して、地方自治体の顔ともなり得る、日本酒・日本ワインなどの地理的表示(GI)も多数あり、日英で保護される酒類のGIリストは、今後も追加されいく見込みである。
- ・日本は不景気な感じがあるが、英国や、シンガポールなどでは投資も活発で、景気が上向いてきている。「攻める英國に負けじと、地方自治体から、攻める日本でいきましょう」ということを訴えたい。

#### (2)地主氏

##### ○日本と英国の旅行市場

- ・現在の日英の入国規制について、日本へ入国する際には、10日間の隔離期間を含め様々な規制があるが、一方で、英国へ入国する際には、ワクチン接種済みであれば、実質的にほとんど規制がないような状況である。
- ・この日英の違いは、それぞれのメンタリティの違いもあると思われるし、ワクチン接種率の高さなど、様々な要因があると思われる。英国の旅行市場として、海外旅行が大きな割合を占めているため、入国規制が強すぎると、旅行業界の事業が成り立たないという事情もある。
- ・また、2019年、英国は国際移民の割合が約14.3%と、日本の7倍多いというデータがあり、海外に家族・親戚・友人がいることが多いので、海外との行き来ができるないと困る

という事情がある。つまり、海外旅行ができないというのは、単に「遊びに行けない」という意味以上に、「家族等に会えない」ということを意味することがある。

### (3)佐浦氏

#### ○コロナ禍における日本国内の酒類消費と日本酒の状況について

- ・2020年、酒類の消費動向(消費支出金額)として、コロナ禍には、外食飲酒は大きく落ち込んだ分、家庭消費の割合が増加した。外食産業にも様々な業態があるが、パブ・居酒屋が、前年比で最も落ち込みが大きい。
- ・2018年から2020年までの酒の種類別の販売数量の比較では、(パブ・居酒屋で消費されることが多い)ビール・発泡酒・ウイスキー・ブランデーの落ち込みが見られる一方、リキュールやスピリッツ(チューハイや新分野のビール類)が伸びている。
- ・日本酒の課税移出数量の前年比推移として、感染者の増減、緊急事態宣言、GoToトラベルなど、様々な要因で増減が見られる。また、家庭向けのパック酒の影響は比較的小ない一方、特定名称酒については、落ち込みが大きかった。なお、日本酒の輸出は、過去10年にわたって増加し続けている。

### (4)吉武氏

#### ○英国人とアルコールの深い関係、アルコールの社会的位置づけ

- ・英国のジンクスとして、不況が来るとアルコールが売れるというものがある。また、コロナ禍において、日本と異なり、英国では酒類に特化した規制はなかった。ロックダウンにも拘らず、2020年は売上額は上昇した(英国の飲酒の80%以上は家庭消費)
- ・英国では、飲酒人口は成人の約半分である。一番飲まれているのはビールであり、スピリッツ(蒸留酒)も根強い人気がある。意外にも、ワインは1970年代より浸透してきた、庶民にとっては新しい文化である。なお、日本酒はレストラン消費依存が大きい。
- ・英国で、未成年(18歳以下)のアルコール購買は禁止だが、5歳からは、成人同伴であれば家庭での飲酒は違法ではなく、16歳以上は成人同伴であれば外での飲酒も購買も可能。

#### ○アルコール飲料のトレンド

- ・2000年をピークに飲酒人口は減少中。近年、Teetotalers(絶対禁酒主義者)が若年層で増加中。
- ・2020年のコロナ初期は「飲み慣れたお酒の買い占め」「家飲み」などの傾向が見られたが、その後、飲み慣れたお酒に飽きてきた後、2020-21年は新しいお酒をオンラインで探したり、家庭醸造をする人が増えた。(英国では家庭醸造は合法。蒸留は違法。)また、2021-22年は、クリエイティブなカクテル(スピリッツ)の人気が急上昇中で、蒸留酒(テキーラなど)の売り上げが上昇しているため、日本のウイスキー・焼酎・泡盛や、日本酒もカクテルベースとして、新たな市場にPRするチャンスではないか。

## 3.意見交換

質問・コメント		回答・コメント	
片岡氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英国での飲酒の年齢制限が日本と大きく異なることに驚いた。</li> <li>・海外向けに、日本の酒類の新しい飲み方を提案する方法があるか。</li> </ul>	吉武氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余談として、かつて、水質が悪かったころは水よりもビールやワインを子供に飲ませていたこともあるようだ。</li> <li>・今後の日本酒の新しい飲み方の打ち出し方としては、日本側から言わなくても、英國のクリエイティブなミクソロジストが考えてくれると思う。</li> </ul>
地主氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英国人が日本に観光したときにあまりお金は使わないが、お酒にかける金額が大きいのが特徴。</li> <li>・英國における、日本産の焼酎・ウイスキーなど、日本酒以外の酒類の人気はどうか。</li> </ul>	吉武氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本酒の人気が高まっているとはいえ、全体の割合では、0.03%程度のシェアしかない。裏返せば、ものすごいポテンシャルがあるということになる。</li> <li>・日本酒以外にも、焼酎・スピリッツなどの可能性は大いにあると考える。</li> </ul>
佐浦氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本で、2020年に家飲みが増えたが、2021年はこの伸びがひと段落した感じがある。ただ、コロナ禍で、「仕事帰りに同僚等と飲みに行かなくても、その他の手段でコミュニケーションがとれる」ということを人々が感じて、今後、コロナ禍が終わっても、仕事帰りに飲みに行くという習慣が戻らないのではないかと懸念している。</li> </ul>	吉武氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ご指摘のとおり、アルコールによる経済効果は大きい。</li> <li>・ただ、英國で、飲酒する人の10人に1人は、依存症の問題を抱えているという負の側面もあることを認識しておく必要がある。</li> </ul>
吉武氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の若者の飲酒の状況はどうか。</li> <li>・アルコールの規制は、国によって違う。アルコールをPRする際には、通常は、まず最初に富裕層を狙うが、本当にトレンドを作るのは若者たちである。若い消費者向けにPRするという方法もあるのではないか。</li> </ul>	佐浦氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・例えば、大学生では、(20歳を境に)飲酒できる層と、飲酒できない層がある。未成年の飲酒が発覚した場合には、罰せられる。</li> <li>・ただ、(飲酒できる層の)大学生の中で、日本酒を楽しむサークルもでてきてているのは面白い傾向。</li> </ul>

## 4.質疑応答

質問・コメント		回答・コメント	
鈴木クレアロンドン事務所長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロンドンは多国籍都市だが、エスニシティによって、コロナへの反応が異なることはあるか？</li> </ul>	片岡氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・例えば、アジア人はマスクをするが、非アジア人はマスクをしている人が少ないという傾向があった。また、生活スタイルとしても、食事を自炊するかどうかについて、アジア人は比較的</li> </ul>

			<p>自炊をする人が多いが、非アジア(中近東、中央ヨーロッパなど)はそれほど自炊しない傾向があるようだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日本人のように比較的ルールを守るグループもある一方で、自分たちの確固とした生活スタイルがあって、受け入れるのが合理的だと思うルールについてのみ取り入れるというグループもいて、ルールに対する考え方の違いというものが見られた。</li> </ul>
鈴木クリアロン ドン事務所長	<ul style="list-style-type: none"> <li>英国人にとっての、日本観光のツボは？何が受けるのか？</li> </ul>	地主氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>英国人は、日本に強い関心をもっている。日本でのアウトドアアクティビティや、伝統文化なども関心が高い。東京・大阪などのゴールデンルート以外の地方の観光地に出かける傾向も続いている。</li> </ul>
鈴木クリアロン ドン事務所長	<ul style="list-style-type: none"> <li>英国でノンアルコールが伸びているようですが、その理由は？</li> <li>ノンアルコール日本酒の可能性はあるか。</li> </ul>	吉武氏 片岡氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>お酒を飲まない人も増えてきたが、社交のため、飲む場所・機会には参加したいという人もいるため、ノンアルコールのニーズがある。</li> <li>ノンアルコール日本酒がどれだけ受け入れられかは未知数。</li> </ul> <p>・日本酒のアルコール度数が高いという誤ったイメージを持っている人が多い。そのため、ワインと同じくらいであることを説明したり、アルコール度数5%程度のスパークリングの日本酒を提案することもある。</p>
鈴木クリアロン ドン事務所長	<ul style="list-style-type: none"> <li>英国にきて、日本の商品・サービスのすばらしさに気づくことがある一方、メンタリティについては、英国人から学ぶことが多いように思う。</li> <li>例えば、岩手県で、長期にわたりコロナ感染者が出なかつたが、初めて感染者が出たときに批判があったことにがっかりした。</li> </ul>	片岡氏 吉武氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本は同質社会の認識や、県単位の帰属意識が高すぎる。日本パスポート発行数は人口比で少なく、海外の多様な文化に直接触れていない人が多い。</li> <li>一方で、英国では多くの人が海外旅行等をして多様な文化に触れている。</li> <li>日本も多様さを受け入れられるようになると良い。</li> </ul> <p>・日本と英国で、同じ島国でありながら、守る国と、外に出ていく国との違いがコロナ禍であぶりだされた。国際社会のメンバーとして、遅れることがないよう、どのようにすべきか、考えていくべき。</p>

(以上)

